宣教の声
The Voice of Mission
海外邦人、欧州諸国、
および迫害下にある聖徒への宣教
2023年 1 月号
No. 484

東京都心から南方287kmの海上にある
八丈島・父島の三日月山展望台からの朝日

ミッション・宣教の声 主幹
黒田 禎一郎

人生で受ける最高の祝福

アロンとその子らに告げよ。
「あなたがたはイスラエルの子らに言って、
彼らをこのように祝福しなさい。」
民数記6:23

新年のごあいさつを申し上げます。

神の祝福が皆様の上に豊かにありますように。

イスラエルの指導者モーセの兄アロンは祭司でした。彼は民と神との間に立ち、仲介者として働きました。アロンが祈った「祈り」が、一番はじめの「祝祷」と言われます。ユダヤ教会堂での礼拝において、今日もラビは「アロンの祝祷」を祈ります。祝祷にはさまざまな定義がありますが、その一つは「民が神の恵みの下に置かれること」、です。

ところで、「アロンの祝祷」は三部構成です。先ず『主があなたを祝福し、あなたを守られますように。』(6:24)です。注目したい点は、前節までは複数形(民)でしたが、「主があなたを」と単数形で祈られていることです。神の祝福はあなたに個人的に臨むものです。あなたが神の恵みの内に置かれる幸いです。

次に『主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。』(6:25)という祝祷です。主が御顔を太陽の光のように、あなたに照らされるならば、なんという幸いでしょうか。神の恵みは、赦し、あわれみ、霊的賜物、平和、主との交わりなど多くあります。主が御顔をあなたに照らされるならば、あなたは神の恵みの下におかれます。詩篇にはそれらの祝福の詩歌が、多く歌われています。それは主である神と選民イスラエルとの関係であり、また神と私たちの関係でもあります。

そして『主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。』(6:26)と、祭司アロンは祈りました。主が御顔をあなたにパーソナルの視線を向けてくださり、平安を与えてくださいます。主が与えてくださる平安(シャローム)こそ、私たちが必要とする人生最高の祝福です。イエス・キリストは「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。」(ヨハネ14:27)と言われました。

「アロンの祝祷」は、神の祝福、守り、光、輝き、愛・好意、平安が祈られています。主の民が受ける神の祝福は高揚していきます。なんという幸いではありませんか。人間の願望の祈りではなく、神の命令でアロンが祈った祝福の祈りです。つまり神が祝福くださる保証付きの祝祷です。新しい年2023年が、「アロンの祝祷」で先導されますように。

海外邦人宣教

海外邦人宣教を祈る

黒田禎一郎

約48年前、私はドイツ（当時西ドイツ）において、主から召命をいただき海外邦人宣教に召されました。当時の欧州には日本語キリスト集会は存在しましたが、教会形成した日本語キリスト教会はまだ無かった時代でした。北米や南米と違い日本人定住者や永住者が少なかった欧州で、果たして日本語キリスト教会は存続できるだろうかと議論したことを覚えています。しかし振り返れば、現在ヨーロッパ各地には日本語キリスト教会（集会）があり、多数の宣教師、牧師たちがイエス・キリストの福音を宣べ伝えておられます。それは神の恵みであり、誠に喜ばしいことです。時代は歴史の中で大きく変化してきました。そこで、これからの海外邦人宣教について考察します。

6名の受洗者があった第一回洗礼式

日本語キリスト教会の誕生

欧州初の日本語教会となったデュッセルドルフ日本語キリスト教会を一例として挙げるならば、日本語キリスト教会誕生の軌跡を知ることができます。1970年代は日本経済の高度成長最盛期、日本製品は世界各地で飛ぶように売れた時代でした。必然的に日本人ビジネスマン駐在員が各地で大活躍した時代でした。デュッセルドルフは地理的に西ドイツ中部に位置し、ノルドライン・ヴェストファーレン州都として経済中心地であり、しかもアウトバーンや空港のインフラにも恵まれ、日本人駐在員家族が大勢住むようになりました。日本人小学・中学校はじめ、日本食レストランや食料品店などもでき、最盛期には約1万人もの定住者がいて、ドイツ人から「日本人コロニー」と呼ばれていました。

そのように多数の日本人が居住する日本人社会で、さまざまな問題と必要が生じてきました。特に心の問題から神を求める人々がおられ、一時は週に8回の家庭集会を開き伝道した思い出があります。第一言語で神のみことばを聞きたいと願う方々が、多くいました。それほど心の渇望が大きかったと言えましょう。それは小さな霊のリバイバルで、受洗者は次々におこされました。当時の小さな群れにはビジネスマン家族はじめ、大学や音楽大学留学生や研究者、国際結婚された方も徐々に加わるようになり、超教派の福音的教会が生まれました。

デュッセルドルフ日本語キリスト教会の誕生は、歴史と経済の流れの中で誕生した教会ですが、今振り返れば神が主権を持って先導してくださったことは明らかです。生ける主なるお方が建てられたキリストの教会です。

明日の海外邦人宣教

1. 宣教は地政学や経済と無関係ではない

世界が政治、経済、軍事等の力の関係で動いている中、人流もそれと共に変わります。デュッセルドルフ日本語キリスト教会はその一例です。しかしどのような世界情勢下に置かれようとも、共通項はキリストの福音が必要であることです。人は創造神を知り救われなければ真の平安はありません。さらにグローバル化は前進しても、第一言語でキリストの福音を伝える同胞伝道は大切なミニストリーです。

2. 時代に即した宣教を考える

近年グローバル化は急速に進み、SNSが高度に発達してきました。半世紀前までの通信事情では考えられません。ニュースが地球一周するには、今では0.25秒もかかりません。SNSの発達により個人が発信局となり、情報提供できる時代です。膨大な量のニュースと情報が飛び交い、中には人を惑わせるフェイク・ニュースも少なくありません。しかしながら、私たちは神が許されたSNSをキリストの福音宣教に用いることも可能です。世界人口は昨年11月に80億人を突破しました。従来の伝道方式では、福音を世界中に伝えるには相当な時間が必要でした。しかし今では、それが一瞬で可能な時代となりました。終末論的視点から見れば、残りの時間は多くありません。

3. 主権は神にある

しかしながら、聖書は「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。」（Ⅱテモテ4：2）と勧めています。大切なことは、全ての主権は全能者の神がお持ちであることを認識すべきです。世界の政治、経済、軍事がどのように動き、海外在住邦人動向がどのように移ろうとも、キリストの福音は変わらない真理です。

全ての主権は神にあることを覚え、みことばに従順に従い海外邦人宣教を進めることは大切です。先ず海外邦人宣教の働き人（宣教師）と海外の教会（集会）のために、祈ることはできます。祈るためには現地の宣教情報を入手し、具体的に祈ることです。祈りは神の力を経験します。次に海外邦人宣教のために経済的支援をすることも可能です。昨秋からの急速な円安傾向は、海外にいる神の働き人を直撃しています。私たちは今できる限りの祈りと力を海外邦人宣教に注ごうではありませんか。

ベルガー教会時代の礼拝

伝道、プレゼントにもおすすめです。

聖書の集い・連続メッセージ

「讃美歌詩・聖歌詩の背景から学ぶ信仰」

その時、わがたましいは歌う

ミッション・宣教の声 主幹 黒田禎一郎

第1巻～第9巻 刊行

多くの人たちに親しまれている讃美歌詩・聖歌詩の背景にある作詞者の信仰に焦点をあてる励ましのメッセージ集です。

中綴じB6サイズ ¥500（税別）

ご注文は「ミッション・宣教の声」事務局まで。

海外伝道シリーズ

旧東ヨーロッパの教会と信者は今

176

ウクライナ共和国

黒田禎一郎

昨年2月24日、ロシア・プーチン大統領によるウクライナ侵攻が始まり、悲惨な戦争が現在も続いています。戦争は勝つことが目標で、双方が勝つと思っている間は戦争が終わりません。そのため双方に命を落とす犠牲者や負傷者が出て、すでに「戦争疲れ」が現れています。避難民の支援状況も同じく、欧州でも「疲れ」が出てきました。そのような情勢下で、ウクライナ・チェルノブイリ近くのダイマー出身のウラジミール・レシェニク長老の証しが入りましたので紹介します。

ウラジミール・レシェニク長老夫妻

チェルノブイリ原発事故

1986年4月26日午前1時23分、チェルノブイリ原子力発電所で起こった爆発事故は、私たち家族の生活全体を変えてしまいました。私はバス運転手として、破裂した原子炉のすぐ近くから人々を避難させるため、プリピャチ市に行くよう命令を受けました。はじめの 3日間で、私は大量の放射線を浴び、健康を大きく害する身となりました。私の父は医師として、私の被曝量は命を落とすに十分であることを知っていました。そこで父は私にできるだけ遠くに引っ越すよう説得してきました。同年5月4日、それは復活祭の徹夜祭でした。私は妻のタチアナと息子ドミトリーと一緒に、隣国モルドバの親戚宅に避難するため出発しました。 余りに急いでいたため、スーツケースを2つしか持ち出せませんでした。

主の愛に動かされて

親戚宅での新しい生活は、私たちが定住する家ではありませんでした。そこで何度も引っ越さなければなりませんでした。 しかし、2人の子ども（ウラジスラフとアリナ）が与えられました。さらに私たちはイエス・キリストに出会い救われ、人生が一変しました。ウクライナにいる両親はクリスチャンではなかったので、私たちは両親にイエス・キリストを伝えるため、ウクライナに戻りたいという衝動に駆られました。私たちの人生は確かに神の手の中にあります。

1992年6月19日、モルドバで内戦が勃発し私たちの町も爆撃を受けました。それは実に恐ろしいことでした。私たち家族全員は部屋の床に座り、神に一緒に死ぬ恵みを与えてくださいと祈りました。もし爆弾が直撃し私たち両親だけが命を落とすことになれば、残された子どもたちは孤児となるからです。私たちの家の窓ガラスは爆弾の破片で粉々になりましたが、私たちは無傷でした。主イエスは私たち家族を確かにお守りくださいました。

神の恵みに守られ

日の出とともに、私たちはチェルノブイリから持ってきた古い2つのスーツケースに再び荷物を詰め込み、車に乗り込んでウクライナのダイマーに戻りました。途中、戦車が通りに転がり邪魔な障害物が多くありましたが進みました。その時フロントガラスに大粒の雨が落ち、車は前方に進めないほど激しい雨が降り始めました。しかし私はバス運転手として、道路をよく知っていましたので街から抜け出す道を知っていました。車を運転しながら、後方を見ると暗雲が街全体に、覆いかぶさるように横たわっていました。しかしドニエストル川の急な堤防に到着すると、太陽が再び顔を出し輝き始めました。それは不思議な現実でしたが、確かに神の恵みに守られました。

34歳で家族と共に母国へ

ダイマーに戻った私は現地の教会に籍を置き、自給伝道を始めました。そして私は神とキリスト教会から長老として召されました。それから長い時間を経て、母はやっと主イエスを信じ救われました。そして7年後、父も死の床でイエス・キリストを信じ回心しました。さらに神は私たちに2人の娘（アンナとアンジェリカ）を与えてくださいました。

私は神の救いにあずかったものとして、宣教の思いに燃えていました。主は立ち入り禁止区域のポレシェ地方への扉を開き、キリストの福音を伝えるため扉を開いてくださいました。そこはチェルノブイリ立入禁止区域に隣接する場所でした。またベラルーシ国境にあるポレスコエの町にも、イエス・キリストを信じる群れがありました。しかしその後、その町は高レベルの放射線により強制移転させられました。このようにしてダイマーで再び30年間過ごし、現在64歳になりました。コロナ感染の試練も生き延びましたが、私と妻の健康状態は著しく悪化してきました。

このような私たちの人生はチェルノブイリ原発事故の大試練の中に置かれましたが、神は私たちを平和のメッセンジャーとして用いてくださいました。幸いにもアメリカに住む娘のアンナが、私たちの健康を心配し同居するよう誘ってくれました。そこで私たちは国際移住協会を通し、米国政府から移民許可を取得することができ、まもなく米国へ移住します。

これはウクライナで神を愛する一人の聖徒の証しです。小国ウクライナは地政学的に大国の間にあり、チェルノブイリ原発事故、そして現在はプーチン・ロシア軍による戦火に巻き込まれています。しかし神は神を愛し神にお従いする者に、尊いご計画を持っておられることを覚えます。どうぞ、お祈りください。

（つづく）

戦火での洗礼式

家族が再生する日

共に寝起きし、同じものを食べ、一つ屋根の下で過ごす、家族という名の共同体は、この世で最も強い絆で結ばれている人間関係であります。しかし、日本における殺人事件の半数は、家族間で起きていると言われています。罪ある人間同士のつながりは一度壊れてしまうと、家族であろうと修復が困難になり、家族であるからこそ、悲劇を起こしてしまう結果となり兼ねません。けれども、その脆い家族間の中心に、創造主なる神が働かれるならば、どんなに壊れた家庭であろうと、新しく再生され、愛の帯で結ばれた家族の姿へと変えられる御業が起こされます。

飢餓が奪った家族のしあわせ

ミヨンの父は3人の娘たちが、とにかく愛しくて仕方がなく、特に末娘のミヨンに対しては、目に入れても痛くないほどの可愛がりようでした。愛情に溢れた父に加え、料理上手な母、優しい兄、そして、慈しみに満ちた祖母との7人家族で、貧しくとも幸せな一家がそこにありました。しかし、多くの北朝鮮世帯がそうであったように、国家を揺るがした大飢餓が、この家族の幸せも変えてしまいました。どんなに働いても、家族を満足に養うことができなくなった父は、次第に酒量が増えるようになりました。一家は畑を耕し、家族総出で必死に働いても、この飢餓に勝つことはできませんでした。やがて、父と母が相次いで亡くなり、頼りになる兄も10年の兵役を終えると、家族から遠く離れた地に強制配置させられました。姉たちもそれぞれ嫁ぎ、7人家族は離れ離れになりました。残された末娘のミヨンと祖母は、叔父の家に身を寄せることになりました。白頭山麓の国境都市にいたミヨンは、商売するという名目で中国に渡りましたが、結局、中国で彼女も人身売買の餌食となりました。

神の御業が成されるために

ミヨンは中国の貧しい農村の嫁として買い取られ、夫は朝鮮族であったため幸い言葉が通じましたが、愛のかけらも無い結婚生活が始まりました。そんなミヨンも娘を授かり、我が子のために辛くとも、毎日一生懸命働きました。夫は酒とギャンブルに溺れ、生活費のほとんどは酒代と賭け事に消えました。博打に負けて金を失うたびに夫は酔いつぶれ、ミヨンに暴力を振るいました。疲弊し切った彼女も、飲めない酒を口にすることが多くなりました。夫には愛情はおろか、憎しみだけが募るばかりでした。

そんな時、ミヨンは朝鮮族の伝道師と出会い、教会に誘われ、朝鮮族の礼拝に参加するようになりました。彼女は礼拝を通じて神と出会い、イエス・キリストを救い主として受け入れました。その日から自分の生命や人生よりも、イエス・キリストが彼女の全てとなりました。新しく変えられたミヨンに悔い改めが起こされ、そんな彼女に聖霊は夫を赦す心を与えて下さいました。妻の変わった姿を見た夫にも変化が見られ、ミヨンを大切にするようになりました。ミヨンの悔い改めと赦しがこの一家を変え、やがて、夫と娘も救われました。家族がキリストの愛によって再建され、新たな一歩を踏み出そうとしていましたが、ミヨンと夫は娘の将来を案じ、この連鎖的に貧しい環境から娘を出そうと考えました。彼らは韓国人宣教師を通じて娘を韓国へ送り、中国籍であった夫も娘に同行し、二人は大韓民国へと渡りました。

その地にひとり残されたミヨンは、朝鮮族の宣教師たちと共に地域伝道と北朝鮮宣教に励むようになりました。神は惨めな人生を嘆いていたミヨンを通して、その地で御心を成就され、御業が起こされるために既にミヨンを選び、ここまで彼女を導かれたのでした。

キリストにあっていつも一つ

中国籍を持たないミヨンは苦労の末、2012年に彼女を待つ家族のもとへ、大韓民国に渡りました。今では愛する夫と娘の3人で、再び幸せな家庭を取り戻すことができました。ミヨンは豊かな自由をただ受けるだけでなく、絶えず神の御言葉の中でひざまずき、自分を捧げました。苦労しながら神学大学院コースを修了し、宣教師として神に仕え、教会も開拓しました。その働きの傍ら、米国宣教師たちと共に北朝鮮宣教とその救済に献身しました。また、脱北者宣教と奉仕の場に、いつもミヨンの姿がありました。

ミヨンはある時、自分の北朝鮮の家族たちの消息を知ることができました。100歳近くなった祖母は、実は根強い信仰者であり、二人の姉たちにも福音が届き、彼女たちは密かに信仰を守りながら生きていると聞きました。そして、優しかった兄は中国で福音を聴いた後、北朝鮮への伝道のため祖国に戻りましたが、当局に逮捕され、最期まで秘密を守り通して殉教したと聞かされました。故郷の愛しい家族たちとの再会は、この地上では叶わぬ夢となりましたが、どんなに遠くに離れても、いつもキリストにあって家族は一つに結び合わされ、いつか必ずまた会えるとミヨンは確信しています。

私たちキリスト者にとって、愛すべきもう一つの家族とは、キリストにある家族です。それは教会という共同体であり、さらには教会や教派、そして国境を越えて、キリストを主とする世界中の兄弟姉妹との大きな家族がいます。現在、北朝鮮をはじめ、多くの国々で厳しい迫害下におかれ、苦しみの中にいる私たちの家族もいます。私たちはこの家族たちにも、祈りや様々な方法で手を差し伸べていく義務があります。たとえ、互いを知ることがない兄弟姉妹たちであろうと、それでも彼らは私たちの家族であり、その家族たちのために祈らなくてはいけません。やがて来るべき日には天の御国で、イエス・キリストを中心に世界中の兄弟姉妹たちと一つの食卓を囲み、大きな家族が再生する、そんな日が来るのです。

こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。
（エペソ2:19）

（名前は仮名です）（次号につづく）

初等中学１年の「社会主義堂道徳」教科書

ド イ ツ

オルガ・ラムパーター女史

●エッセン市のオルガ・ラムパーター女史（31歳）は、今話題の人です。彼女は現在、精神と心の問題で悩む人たちを助けるカウンセラーとして働いています。しかし彼女自身は生まれながら、「脆性骨疾患」という難病を抱え生きてきました。彼女の骨構造は他の人たちよりはるかに弱いものですが、両親との生活と教会生活でしっかりした信仰を持つ彼女は、自分の気持ちに素直に生きてきました。彼女のその生きる信仰の姿は、実に模範的な証しとなっています。

しかし彼女は10代の頃、うつ病と大きな自己不信に陥り悩みました。その理由は自分が身体的不自由を抱え、普通人のように行動できないことにありました。神は私を愛して下さっていることは明らかでしたが、それが事実として現れて欲しく願い求めました。神は愛して下さっているからこそ、確かに私をお造りくださったはずである、という考えが頭から離れませんでした。それから彼女は神によく祈りました。すると環境や誰かが自分を変えてくれるのではないことに気づき、神が自分にどのようなご計画を持っておられか知るべきであると教えられました。

そのような彼女の内側の変化を知った人たちが、次第に彼女の元に来て、いろいろな相談をするようになりました。そのような流れの中で、神は自分がカウンセラーとして生きるべきことを意識するようになりました。コロナ感染症の大流行の時にも、また他の困難な時にも、神は確かに共にいてくださったと、彼女は証しています。どうぞ、彼女のためにお祈りください。

救急車贈呈式でのハンブルク牧師（右から3人目）

●ブレーメンのアンドレアス・ハンブルク牧師（49歳）は、昨秋ウクライナ南西部イヴァノ・フランキーフスク市へ、ブレーメンのキリスト教会からの救援活動の一つとして救急車を届けました。その時、港湾都市マリウポリ出身のウクライナ兵士からロシア軍捕虜となった話を耳にしました。そのウクライナ兵士は、ロシアとの捕虜交換で帰国した人たちでした。驚くことにウクライナ兵士の数人が、ロシアの捕虜収容所で、イエス・キリストを信じる信仰に入ったとのことでした。その時、捕虜交換として帰国したウクライナ兵士は２１５人でした。彼らはロシアの捕虜収容所で拷問を受け非常な苦しみを経験しましたが、「聖書が必要である。」と声を大きくして語りました。ハンブルク牧師は彼らが捕虜収容所でどのようにしてイエス・キリストを信じるようなったか尋ねたところ、収容所の警備員（看守）の一人が、聖書をひそかに手渡してくれたとのことでした。回心した兵士は、「聖書を捕虜収容所で読む中で、特に詩篇が非常に大きな励ましを与えてくれた。」と語りました。捕虜収容所で数人が回心したことは確かですが、何人が救われたか正確な人数は不明です。ある兵士は「回心した兵士は多い。」と言いました。神のみがご存じです。このような戦火で、神は聖書のみことば通し兵士たちを救いに導かれました。なんという幸いな証しでしょうか。主の御名を崇め賛美します。

ナイジェリア

レア・シュリブ姉妹

昨年10月9日、武装した兵士たちが礼拝中のキリスト教会を襲撃しました。その際、2人（母親と幼い小ども）が亡くなり3人の負傷者が出ました。場所は首都アブヤから南方約200km離れているコギ州のフェレエレです。犯人は不明でしたが、その後西アフリカのIS（イスラム国）が犯行声明を出して明らかになりました。ナイジェリアでは、このようなクリスチャンへの攻撃が頻繁に発生しています。2021年には、4,650人ものクリスチャンが殺害され犠牲となりました。この人数は世界のどの国よりも多い犠牲者数であると、現地の人権団体は叫んでいます。

ナイジェリアでは2018年2月19日、過激派テロ集団「ボコ・ハラム」がダプチー市の女子校を襲撃し、11歳から19歳の女子を誘拐した事件はまだ記憶に新しく残っています。その後5人が死亡し、それから104人が釈放されました。しかしクリスチャンの女生徒であるレア・シュリブ姉妹は消息不明のままです。報道によれば、彼女はイスラム教への改宗を迫られているとのことですが、それを拒否しているとのことです。彼女については様々な報道がありますが、真実は明らかではありません。人口約2億600万人、キリスト教徒が46.3%、イスラム教徒は46.2%、地元土着宗教が7.2%です。どうぞ、お祈りください。

世界で迫害が起こっている国々

2022年末、独キリスト教出版社「イデア社」は「世界で迫害が発生した国々の索引」を発表しました。それによれば、第1位はアフガニスタン、第2位は北朝鮮、そしてソマリア、リビア、イエ―メン、エリトリア、ナイジェリア、パキスタン、イラン、インド、そしてサウジアラビアの順に続きます。これら11ヶ国は特にクリスチャンへの迫害が激しい国々でした。しかしイラクは第14位ですが、数年前まではIS（イスラム国）の激しい攻撃にあった国です。ISは歴史的建造物だけでなくなく学校、病院、福祉公共施設、さらにキリスト教礼拝堂も破壊しました。

イラク北部の小都市カラコシュにあったシリア・カトリック教会の聖ベーナム・セラ教会堂も、2014年から2016年にかけてISによって破壊されました。キリスト教会はキリスト教彫像はじめ、古い価値あるキリスト教絵画を破壊しました。しかし、この度やっと復旧工事が終了しました。復旧工事はゲオルゲ・ヤホラ司祭によって導かれ、多数の方々に勇気と自信を与えました。ISがイラク侵攻した2014年夏以前は、約12万人のキリスト教徒がいました。多数のイラク人はニネベからクルド人地区へ避難していましたが、これまでに約半数が戻ってきました。どうぞ、イラクの復興のためにお祈りください。

再建した聖ベーナム・セラ教会堂

ハンガリー

ハンガリー国は、アフリカとアジアのクリスチャンで迫害を受けている人々に、返済不要の奨学金を出していると発表しました。情報誌「ハンガリー今日」のニュースでは、この制度は人道的な立場から5年間にわたり支援するプログラムです。ハンガリーのトリスタン・アズベイ国務長官は、「奨学制度の目的は、アフリカとアジアの若いクリスチャンが、知識と経験において豊かな知識を習得し、祖国に帰り国の復興に励んでいただくところにある。」と語っています。それは「地の塩」の働きでもあると述べています。現在、迫害があるアフリカとアジアから500人のクリスチャン学生が、その返済不要の奨学金制度に預かっています。すばらしい奨学金制度です。

英　国

ヒンドゥー教寺院で祈る
スナク首相夫妻

大英帝国にヒンドゥー教徒であるリシ・スナク氏が、第79代首相として選出されました。スナク氏は1980年5月12日に、英国ハンプシャーで生まれです。父がケニア生まれの医師で、母はタンザニア生まれの薬剤師です。祖父はインドのパンジャーブ出身です、家族は1960年代に東アフリカから英国へ移住しました。スナク氏とマーシー夫人は2022年現在、英国で222番目の富豪であり、その総資産は7億3,000万ポンドと言われています。

信仰の自由が認められている英国で、キリスト教徒でない異教徒が英国政治の最高責任者として選出されたことに問題はありません。しかしキリスト教を国教とし、長年キリスト信仰を誇りとしてきた英国民には複雑な心境があります。一概に英国におけるキリスト教の衰退とは言えませんが、欧州先導国としてきた英国で大きな変化が起こりつつあることは確かでしょう。ヒンドゥー教徒数はインド国内で約10億人、その他の国の信者数を合わせると約11億人以上とされています。キリスト教、イスラム教に続いて世界で第三番目の宗教です。英国のためにお祈りください。

ト　ル　コ

多くのイラン人が信仰の自由を求めてトルコに渡っています。イラン人の目には、母国よりトルコには信仰の自由があると写っているからです。多くのイラン人は宗教心に富む人々で、イスラムの神をもっと知りたいと願っています。そのトルコには、イラン人の秘密のキリスト教会があります。トルコに渡ってきたイラン人が、イエス・キリストの福音を聞き救われています。彼らは40人から50人密かに集まり、聖日礼拝が開かれています。また祈祷会や聖書研究会も開かれ、洗礼式も施されています。礼拝には40人から50人が集まり神を礼拝しています。保安上の問題から氏名と場所は発表できかねますが、主のみわざが現れています。トルコはイラン人にとって希望の国です。どうぞ、お祈りに覚えてください。

礼拝を守るイラン人聖徒

洗礼を受けるイラン人

今月の囚われ人

私たちはキリスト教出版社「イデア社」と国際人権委員会から出される「今月の囚われ人」を覚え、祈り続けてきました。クリスチャンが迫害と苦難を信仰のゆえに受けている国は、イスラム教国か共産主義国です。「今月の囚われ人」の祈祷課題は約20年続けられてきましたが、近年を振り返ってみても主からの祈りの応答を確認できます。

2013年8月、パキスタンのサジャッド・マシー・ジル兄弟（37歳）は、終身刑で投獄されていました。しかし10年服役し釈放されました。2018年4月、同じくパキスタンのパトラス・マシー兄弟（19歳）は保釈金によって釈放されました。2020年2月エジプトのラミー・カミール兄弟は2年後に釈放されました。2021年6月、パキスタンの精神障害者であるステファン・M・マシー兄弟は釈放されました。また2022年1月、ナイジェリアのクリスチャン・ジャーナリストのルカ・ビニヤット兄弟も、保釈金によって釈放されました。2022年に入り、中国、イラン、エリトリア、インドネシア、パキスタンなどの国々で囚われている聖徒を覚え祈っています。世界中の聖徒たちが苦難下のクリスチャンを祈り覚えていたことに、主は応答してくださっています。どうぞ、続いてお祈りをお願いします。

ミッション・宣教の声 The Voice of Mission
〒541-0041 大阪市中央区北浜2-3-10 VIP関西センター 5F
TEL06-6226-1334 FAX06-6226-1336
E-mail senkyo@vomj.jp http://vomj.jp/
発行人 黒田禎一郎
年間購読料 ¥2,500（送料込）

郵便振替口座 00940-3-301623
銀行口座 三菱UFJ銀行 堺東支店（店番205）
普通口座 3623132「ミッション宣教の声」
The Voice of Mission
MUFG Bank,Ltd. Sakaihigashi Branch
Bank account No.3623132 SWIFT CODE : BOTKJPJT
Bank Address : 59-2 MIkunigaoka-Miyukidoori,Sakai-ku,
Sakai-shi,Osaka-fu 590-0028 JAPAN TEL:81-72-221-3041

編集後記

■新年明けましておめでとうございます。主のみことばが全世界に宣べ伝えられ、主に栄光が帰されますように。本年もどうぞ宜しくお願いします。

■混沌とする世界情勢下で神の日時計は確実に進んでいます。主の時が近づいている時代に、イエス・キリストの教会と聖徒が守られますように。

■「ミッション・宣教の声」は今年も迫害下の教会と聖徒たち、そして海外在住邦人を覚え、祈りと支援を続けます。どうぞお祈りとご協力をお願いします。感謝。

1981年12月初版発行（毎月1回1日発行）